

『浄土真宗聖典全書』 完結

—「三経七祖篇」について—

第3回

浄土真宗本願寺派総合研究所
教学伝道研究室〈聖典編纂担当〉

はじめに

この度、浄土真宗本願寺派総合研究所において編纂を進めてきました、『浄土真宗聖典全書』全六巻がついに完結いたしました。『浄土真宗聖典全書』（以下、『聖典全書』）の完結を記念して、今回は第一巻の「三経七祖篇」（平成二十五年三月刊行）について、その魅力や活用法をご紹介しますと思います。

I はじめての収録聖教—異訳経典—

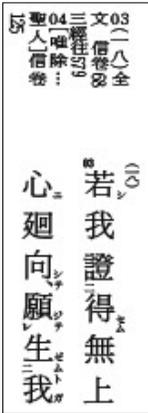
「三経七祖篇」の収録聖教は、浄土真宗の根本経典である『仏説無量寿経』（大経）・『仏説観無量寿経』（観経）・『仏説阿弥陀経』（小経）の浄土三部経と異訳大経・異訳小経、ならびに七高僧の著作（論釈）です。このなか、異訳大経や異訳小経といった異訳経典については、先行して編纂された「浄土真宗聖典シリーズ」（原典版・註釈版・現代語版）

には収録されていませんでした。ですから、本願寺派から刊行される聖典としては、はじめての収録となります。

もともとインドの言葉であった経典は、中国において漢語で翻訳されます。その翻訳は、一つの経典に対して一度だけではなく、時代や翻訳者を変えて複数回行われることがあります。たとえば、私たちが依用している『仏説無量寿経』は、魏訳と言われており、三国時代の二五二年に康僧鎧（訳者について諸説あり）という訳経僧（経典を翻訳する僧侶）によって、中国の言葉（漢語）に翻訳されたものと言われています。それ以前にも『天阿弥陀経』や『平等覚経』がすでに翻訳されていますし、それ以降にも『無量寿如来会』や『莊嚴経』といったものが翻訳されていますので、今現存する大経の異訳としては、四本が確認されています。また、中国の長い歴史の中で翻訳されてきたのは、今は現存しませんが、この外に七本あったと言われています。こ

のように浄土三部経の内、『仏説無量寿経』には異訳経典が存在し、同様に『仏説阿弥陀経』にも異訳経典として、『称讃浄土経』が現存しています。『仏説無量寿経』と異訳大経、『仏説阿弥陀経』と異訳小経には、文言や内容の相異が見られ、親鸞聖人もこれらの相異に注目し、主著『顕浄土真実教行証文類』（以下、『教行信証』）などに、異訳大経・異訳小経を引用し、浄土真宗の教義を明らかにされています。親鸞聖人がどの箇所を引用されているかは、「三経七祖篇」の異訳大経・異訳小経の本文の上欄にある「連絡ページ」で知ることができます。

たとえば、次の図Aのように、『無量寿如来会』の第十八願文を『教行信証』「信巻」六八頁と、『浄土三経往生文類』五七九頁に、また「唯除」以下の抑



図A 『如来会』
(三経七祖篇)

止の文を「信巻」一二五頁に引用されていることがわかります。

そのなか、特に「信巻」六八頁に引用された部分に注目すると、親鸞聖人は『無量寿如来会』の第十八願文を『仏説無量寿経』の第十八願文の直後に引用することによって、『仏説無量寿経』の第十八願文の「至心信樂欲生」の三心は、「名号を聞くことによつて生ずる信」、すなわち「他力の信」であることを示されているのです。このように、浄土三部経だけでなく、異訳大経をはじめ、異訳小経も親鸞聖人はご覧になられ、それらを『教行信証』等に引用されて、浄土真宗の教義を体系付けていかれたことがわかります。

Ⅱ 浄土三部経の底本について

さて、浄土三部経の底本（文字に起こす元になる本）には、本願寺が印刷・刊行した、本派本願寺蔵版本を採用しています。『聖典全書』の基本方針としては、

「学界等で高い資料的評価を得ている善本を翻刻することです。傾向として

は、比較的年代の古い善本が底本になることが多くあります。浄土三部経の場合、かつて朝鮮半島の高麗三代王の高宗（在位一二一三～一二五九）の命によつて造られた『大蔵経』（高麗版大蔵経）です（ただし高宗の時代のものは再雕本に収まる浄土三部経）。ちなみにこの高麗版は、大正一三（一九二四）年から昭和九（一九三四）年の一〇年間をかけて、日本において編纂された『大蔵経』（大正新脩大蔵経）に収まる浄土三部経の底本となっており、比較的知られた版です。しかし、本派本願寺蔵版本と高麗版『大蔵経』所収本（大正新脩大蔵経所収本）とでは、大蔵経として成立した系統が異なっていて本文の文言の異なる箇所が見られることから、日常的に読み慣れている本派本願寺蔵版本を底本としています。

なお、本派本願寺蔵版本は、慶証寺玄智が安永元（一七七二）年に編纂した

『大谷校点浄土三部経』を、文化八（一八一）年に、本派本願寺から刊行したものです。

Ⅲ 原文に忠実な訓点

次にあげるべき特徴として、「三経七祖篇」では、可能な限り原文に忠実な訓点を付しているということです。

訓点とは、漢文を訓読するための手がかりとして書き入れる文字（送り仮名など）や符号（レ点や一、二の返点など）のことです。「三経七祖篇」は、通常の漢文読みをしていますので、宗派を超えて広く拝読していただけるようになっていきます。一方、親鸞聖人の主著『教行信証』には、浄土三部経や七高僧の著作からの多くの引用について、しばしば親鸞聖人独自の漢文の読み替えがなされています。たとえば、『大経』第十八願成就文は、「至心廻向」（心を至し廻向して）とありますが、親鸞聖人は『教行信証』には「至心回向」と敬語の訓点に

付け替えて、回向の主体を阿弥陀仏とされています（図B参照）。

このように、「三経七祖篇」の原文と、そこから引用されている『教行信証』等の親鸞聖人の著作中の読みと比較することによって、親鸞聖人がどのように読み替えをされているかを、うかがうことができます。

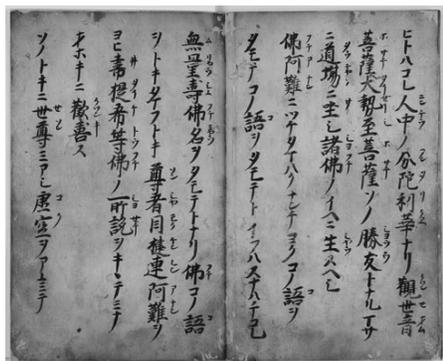
また、「宗祖篇下」には、親鸞聖人が加点（漢文に訓点を書き入れること）された曇鸞大師の『往生論註』や、「善導大師五部九卷」（『観経疏』四卷・『法事讃』二卷・『観念法門』一卷・『往生礼讃』一卷・『般舟讃』一卷）を収録しています。さらに、親鸞聖人の加点を元にした延書（漢文体の原本を書き下しにする）と伝えられる『仏説無量寿経延書』『仏説観無量寿経延書』および『選



図B 右『仏説無量寿経』
左『教行信証』

撰集延書』が収録されています。これらと「三経七祖篇」の本文とを比較することによっても、浄土三部経をはじめ曇鸞大師や善導大師などの著作に対する親鸞聖人の読み方を知ることができます。

以上のように、「三経七祖篇」では原文に忠実な訓点を付しているので、七高僧の著作を文面のままに拝読することができます。それを踏まえたうえで、「宗祖篇上」「宗祖篇下」所収の、親鸞聖人の読み替えがなされている聖教と比較することによって、さらに理解が深まることとでしょう。



『仏説観無量寿経延書』（龍谷大学図書館蔵）

IV 付録の充実

次に「三経七祖篇」の巻末にある付録をご紹介します。なかでも、特筆すべきものは、「親鸞聖人訓点对照表」です。この表は、親鸞聖人の訓点の特徴が学べるように、上段には浄土三部経およびその異訳と七高僧の撰述の訓点を示し、下段にはそれに対応する親鸞聖人の主要な撰述聖教の訓点を示して対照したもので、「三経七祖篇」と「宗祖篇上」をそれぞれ開いて確認することは大切なことですが、この表は一目で訓点の相異を知ることができると便利なのです。

また、年表は、中国・日本における浄土三部経（異訳も含む）および七高僧の著作の伝来と事績を概観することができます。利用しやすいように、中国篇と日本篇に分けています。そのほかにも、阿彌陀仏を讃える偈頌（詩句）の中でも最古に属するといわれる『後出阿彌陀仏偈』を付録としたり、底本対校本一覧、

収録聖教書誌一覧、「浄土三部経」訳経者一覧、『無量寿経』四十八願名と異訳願文対照表、「浄土三部経」科段（経本の構成）など、お聖教を拝読するにあたって、補助となるものを付けています。ぜひ活用していただければと思います。

V 聖教解説の活用

『聖典全書』全巻において、収録聖教の初めに聖教解説を掲載しています。解説は、原則として「概説」「底本・対校本」の項目からなり、「概説」では各聖教の著者や内容、撰述意図等を概説し、「底本・対校本」では底本・対校本（底本と系統の異なる本）に関する書誌的な情報を述べています。聖教解説を読んだだけでその概要を知ることができ、聖教本文を拝読する一助となることでしょう。また、「三経七祖篇」では、大蔵経とは何か、経典の成立と翻訳の過程、漢訳経典の系統分けなどを述べている「大蔵経について」という解説があり

ます。また、七高僧の選定理由や七高僧の教義の特徴をはじめ、親鸞聖人の七高僧観などを述べている「七高僧とその聖教について」という解説もあります。右に述べました異訳経典については、「異訳大経・異訳小経」において詳述しております。これらの解説もぜひ読んでいただければと思います。

VI 次回の紹介

今回、ご紹介しました「三経七祖篇」は、『聖典全書』の第一巻にあたります。詳細につきましては、直接ご購入いただいている、これまで述べました本聖典の特徴を、是非堪能していただければと思います。次回は第四巻の「相伝篇上」（平成二十八年三月刊行）・第五巻の「相伝篇下」（平成二十六年三月刊行）を紹介させていただきます。

問い合わせは総合研究所（075-1371-9244）まで。